

2020 年度 論文チューターワークショップ報告

- 2020 年 11 月 18 日(水)、17:30～19:10 (Zoom による開催)

- 参加者: 18 名

-

プログラム:

スタッフ紹介・趣旨説明(17:30～17:45)

阿部 仁 (国際教育交流センター長／准教授)

第 1 部 日本語添削の実践(17:45～18:40)

論文チューター コーディネーター 大角洋平(法学研究科博士後期課程)

同 吉田聡宗(法学研究科博士後期課程)

同 吉田真悟(言語社会研究科博士後期課程)

1. 論文ドラフトのサンプルの個人添削 (17:50～18:10)
2. 小グループでの振り返り (18:10～18:30)
3. 振り返りの全体での共有(18:30～18:40)

第 2 部 添削スキルアップのためのヒント(18:40-18:50)

柳田 直美(国際教育交流センター 日本語教育部門長／准教授)

大角洋平(法学研究科博士後期課程)

1. カラーコーディングを使った効率的な添削テクニック
2. 頻発するエラーを採録するエラーログの活用による留学生ライティング支援

第 3 部 ワークショップ 質疑応答(18:50～19:10)

- 概要:

2020 年度の論文チューターワークショップ(以下 WS)は、論文チューターの参加を必須とした。ワークショップの目的は①実践を通じ論文チューターとして注力すべき日本語添削方法を紹介し、②日本語添削効率化のためのヒントを共有し、③論文チューターが直面する課題や質問に応える場を提供することとした。

開会あいさつの後、第一部では、各グループに分かれて添削がどこまで進んだかを確認したうえで、添削のコツや、論文チューター活動を行う際の悩みなどが共有された。その後、

各グループでいかなる議論が交わされたかについて、吉田(法研)、大角(法研)、吉田(言社)、柳田(国際教育交流センター 日本語教育部門長/准教授)から紹介された。

添削のコツについては次のことが指摘された。まず、添削対象の位置づけを最初に確認することの重要性である。例えば、添削対象が指導教員からの指導を受ける前のものであれば、指導後に内容の大幅な書き換えが行われることが想定される。この場合、微に入り細にわたって添削して、指導後に一からやり直しになるよりも、論旨を明確にし、指導に支障が生じない限りで添削を行い、指導後に改めて添削を行うほうが、チューター・チューティー両者にとって時間の有効利用となる。

また、母語に由来する類型的誤りの存在を自覚することの重要性である。日本語話者が英語で論文を書く際、母語の影響から時制に関わる文法上の誤りを犯しやすいところ、それと同種のことがチューティーが日本語論文を書く際にも生じる。母語由来の誤りの存在それ自体にチューティー側が自覚的になることが、より良い日本語添削へと繋がりを(その点につき第二部・エラーログ参照)。

そして、日本語添削室の利活用とその連携が提案された。すなわち、チューターによる添削に先立ち、日本語添削室による一般的・包括的な添削を受けておき、その後、チューターがきめ細やかな添削を行うということで、時間の有効活用ができるのではないかと提案された。今後、日本語添削室と論文チューターの連携が制度的に公式化することも期待される。そのほか、時間配分を意識した添削にむけて、論文全体の概略を最初に把握することが良いと指摘された。

他方、添削の悩みについては次のことが指摘された。まず、内容と文法の峻別の難しさである。添削実践上、内容に関わる指摘と文法に関わる指摘の区別は容易ではない。さらに、フォントや書式調整まで添削対象とすべきかも曖昧である。こうした悩みに加え、日本語文法を説明する必要があるのかどうか、あるとすればどうやって・どの程度行えばよいのかといった、論文チューターの理念・日本語教育能力・時間制約に関わる悩みも提示された。さらに、熱心な添削がチューティーのオーサーシップを損なう場合や、添削の際の言葉遣い如何によってはチューター・チューティーの関係悪化へと繋がりと懸念も示された。これら悩みに対する処方箋の一つが、留学生との綿密な打合せである。書式に関わる添削が不要との合意形成がされるならば、そこはカットすることになるだろう。約束事を決めておけば、関係悪化も予防できる。しかし、打合せが万能薬でないのは当然であり、これら悩みは今後も論文チューターの課題となり続けるだろう。

第二部では、日本語添削効率化の方法として、コーディングおよびエラーログについて説明が行われた。まず日本語教育の専門家として柳田(国際教育交流センター 日本語教育部門長/准教授)からは、誤用の類型に応じて色分けを行うという方法が提示された(カラーコーディング)。助詞の誤りは黄色、「」などの記号の利用に関わる誤りは緑、文法的にはおかしくないが日本語話者にとって違和感のある表現は青色にする、などである。

この方法にはいくつかの効能がある。色分けにとどめ、チューティー側がその色の意味に従い、自ら手直すことで作業量を抑えられる。加えて、その営みはチューティー側の日本語論文執筆能力の向上にも繋がる。正しいものへと全て書き換えることは自立した書き手への成長を妨げるおそれをはらむという警鐘に耳を傾ける必要があるだろう。もっとも、こうした方法をどの時期に、どこまで取り入れるかは、チューティー側との打合せに依存するだろう。

また論文チューター経験者として大角(法研)からは、誤用を採録するエラーログについて説明が行われた。誤用を採録し、誤用である理由を表記し、適切な表現を記載するのがエラーログである。これにより、各チューティーが陥りやすい誤りが可視化され、個別にチューンナップされた文法書として学習に役立ち、自立した書き手へとも近づく。さらに、繰り返し同じ指摘をしなくて済むために、作業量の削減も同時に期待される(エラーログ)。もっとも、この方法は、誤用の理由を丁寧に説明することが求められるとすると、チューター側の日本語教育能力に大きく依拠することになる点で限界があるだろう。

第三部では、最後に全体ディスカッションが行われた。フロアからは、誤用が誤用である理由を説明するのが難しいことや、どうしても論文の内容に触れざるを得ない場合もあることなどが指摘されていた。こうした指摘からは、日本語教育を専門とする院生・教員と論文チューター側が連携していくことの可能性・重要性や、チューター理念と実践のすり合わせについてのさらなる議論の必要性が示唆される。